



エイムズ 唯子 in Sedona, AZ



旅するキュイジーヌ

題字：小貫 紘子

最終回 「イチゴにご用心」の巻

ひと昔(?)前のこと。職場の大先輩と、趣味の話になりました。「茶道です。」と言うと「ほう、どのくらいやってるの?」。いつまで続くかと半信半疑で始めた習い事でしたが、稽古に通って3年が経っていましたので、元気よくそうお答えすると、そのフランス文学の教授が、かかか!と気持ちよさそうにお笑いになるではありませんか。「あのね、お茶をやっています、とひとにいうのは、10年稽古してからにしたほうがいいですよ。」



高崎の師匠に稽古をつけて頂くようになって初めての冬の、忘れられない思い出があります。新年明けてまもない日曜日に、同時に入門した友人とふたり、中曽根康弘氏ゆかりの「青雲塾」内の茶室で、師匠の茶席の裏方を手伝うことになりました。朝7時には来てくださいね、とのことだったので、気合を入れて早起きしてみると、夜の間吹雪いたようです。見渡す限りの車道にどっかりと雪布団がかぶさっていました。たじろぎつつ、なんとか時間通りに青雲塾についてみると、師匠が心底驚いたという面持ちで迎えてくださいました。「よく来てくれたこと。この雪だから、あなたたちは無理じゃないかと諦めていたのよ。助かるわ。」

思いがけず師匠を喜ばせることができた私たちでしたが、しかしそう簡単には問屋町の間屋がおろすはずありません。ご亭主として点前をなさる師匠に代わって裏方の水屋を仕切るの

は、厳しいことではピカイチのS先生。「このイチゴ、洗っておいて頂戴」とのご下命に、イチゴくらいなら洗える、とザルにあげて、仕事をしたつもりになっていました。すると、「ちょっと!!イチゴのヘタを取ったのは誰!!」(ぎょっ!!)。点心を小籠に盛り付けていたS先生の叫ぶようなお叱りに水屋が凍りつきました。「今日は、彩りが足りないから、緑の葉を生かすことになっていたのに。余計なことをしてくれて!」

不憫に思ってくださいだったのでしょ。すっかりしょげてしまった私たちを、師匠が最後の茶席のお客様の間にまぜてくださいました。お客様を代表して、亭主とお話する大切なお役目を持ったお正客様が、お天気を心配されながらのご準備が大変だったでしょうと亭主である師匠をねぎらわれると、師匠が私たちに目をむけてくださりながら、「私は慣れておりますけれども、この人たちがねえ、まだお稽古をはじめていくらも経たないのに、あの雪のなか、今朝はよく来てくれたと思って。」

「お茶を習っています」とようやくいえるようになった今も、スーパーで温室育ちのイチゴを見かけると、聞かぬは一生の恥、という諺と師匠の温かい眼差しを思い出します。今、アリゾナの地でお茶を続けられているのは、あの雪の日のお茶会があったからだと思うのです。<5回にわたり「旅するキュイジーヌ」とお付き合いくださり、ありがとうございました>